



神戸新聞

'14.6.18

関西福祉大（赤穂市）の学生が、軽ワゴン車で上郡町の山間部の過疎集落を回る「移動スーパー」を運行している。住民は月2回、若者と交流しながら買い物をすることを待ちにし、「なくてはならない生活の一部」との声が上がる。7月で開始から1年。参加する学生たちは「地域の生活を支えている」との手応えを感じ、活動を続ける。

（杉山雅宏）

関西福祉大の学生 運行1年

同町社会福祉協議会から過疎集落の意識調査を委託された。困難を抱えつつも、山村の生活に愛着を持つ人々の思いに応えるため、ゼミ生と話し合って運行を始めた。

町の中心部から約25分、曲がりくねった山道の先にある暫居地区の富満集落にワゴン車

過疎の4集落へ月2回

高齢住民ら心待ちに



同大社会福祉学部の溝端剛教授(58)のゼミ生19人が、県の助成を得て活動する。巡回するのは上郡町北部の山間に点在する計4集落。同町中心部のスーパーで生活雑貨や食料品を購入し、そのままの値段で販売する。

5年前、溝端教授が

「トライアングル号」が到着すると、住民らが続々と集まる。この日訪れた学生は4人。「おばあちゃん元気にしてた?」「元氣だよ。最近暑いね」。机に並べられたパンや調味料などを手に取りながら、お年寄りとの会話が弾む。

自宅から約2時間か学生が荷物を持って付

けて歩いて来る田渕としえさん(90)は「買い物が楽しみ。ほんと感謝感謝や」と、牛乳を片手に学生たちに笑顔で語り掛ける。

次の目的地、赤松地区の市原集落は最年少の住民が88歳という限界集落だ。買い物の後、それを支える仕組みを生み出していければ」と話している。

集落で店舗を構える移動スーパー。お年寄りが数日分の食料を買い求めた=上郡町大富(撮影・大森 武)